

Papyrus Bodmer XIV-XV と

ヴァティカン写本をめぐって

遠 藤 彰

1

新約聖書のパピルスによるギリシア語写本は、Kurt Aland の登録によると、1963年において76箇¹⁾、1967年において78箇を数え、なお3箇が登録を待っており²⁾、1969年にはさらに300に上る写本が検討をうけつつあった³⁾。パピルス写本の重要性が認識されるようになったのは、1897年エジプトの Oxyrhynchus の砂と塵埃の下から数トンにのぼるパピルスが発見されて以来のことであった⁴⁾。これらの中には、かなりの数の新約聖書写本の断片も含まれており、しかも、新約全体の約40%がこれらの諸断片にみられ、さらにその年代は2～3世紀のものが多いということで、多くの注目をあつめるにいたった。その後1920年に Bernard P. Grenfell が入手し1934年 C.H. Roberts によって発表された Papyrus Ryland's Greek 457 (P⁵²)、1930～31年に Chester Beatty によって収集され1933～37年に発表された Chester Beatty Biblical Papyri P⁴⁵, P⁴⁶, P⁴⁷)、1955～56年ごろ Martin Bodmer によって収集され、F. C. Kenyon によって発表された Papyrus Bodmer II, (P⁶⁶)、1961年ジュネーブ大学の Victor Martin と Rodolphe Kasser によって発表された Papyrus Bodmer XIV-XV (P⁷⁵)⁵⁾などは、新約聖書本文の研究に画期的な局面をひらくものとなった。これらのパピルス写本の年代は、P⁵²が2世紀初期、P⁷⁵が177—225 A.D.,⁶⁾ P⁴⁶が200A.D., P⁶⁶が200A.D.ごろ、P⁴⁵が3世紀、P⁴⁷が3世紀末とされ、従来もっとも古く良質とされていヴァティカン写本(B)またシナイ写本(s)よりも一躍百数十年も早い時期まで、すなわち新約諸書のあるいは手稿本に手の届きそうな時期にまで、本文研究の領域をおし進めることが可能とされたわけであ

る。もちろん、パピルス写本は破損や変形が甚しく、個々の写本の内容も分量的に大きくはないが、しかし、上記の諸写本は P⁵² を除けば大文字写本のあるものに匹敵する分量を有する有力な資料である⁷⁾。パピルス写本の研究は、教父たちの使用聖書本文の研究、古代語訳写本の研究、古代教会の Lectionaries の研究の進展とあいまって、写本 B や写本 s の年代である 4 世紀の壁を越えて、本文の歴史を明らかにすることが可能とされて行くであろう。

いま、ここにとりあげるのは、Papyrus Bodmer XIV-XV とよばれる P⁷⁵ であるが、P⁶⁶, P⁷², P⁷³, P⁷⁴ とともに、ジュネーヴの人文学者 Martin Bodmer の発見によるものである。彼はジュネーヴの郊外の Cologny 町に古文書の図書館を建て、これを Bibliothèque Bodmer と名づけて、上記のパピルス写本もここに収納した。

P⁷⁵ は folio の綴じ合わせ形式で、縦 25.5cm に横 12.7cm の大きさ、書体はやや右に傾く美しい大文字書体である。内容はルカ 3：18—22, 33—4：2, 34—5：10, 37—6：4, 10—7：32, 35—43, 45—17：15, 19—18：18, 22：4—24：53; ヨハネ 1：1—13：9, 14：8—15：8 (欠損部分がある)。ページ数は 102, 欠損部分を補えば元来は 144 ページの分量であったらしい。コラムは 1 列で、1 列には 38 行ないし 45 行、1 行には 25 字ないし 36 字が書かれている。年代は、Oxyrhynchus Papyri 2293 (2 世紀), 2322 (2 世紀あるいは 3 世紀初頭), 2370 (200 A.D.ca) その他との関連を手がかりに 175 A.D. と 225 A.D. の間とされている。この年代が正しいとすれば、P⁷⁵ はアレクサンドリアのクレメンスと同時代でオリゲネスよりやや早いこととなる。作製の場所はアレクサンドリアである。ルカでは 3 世紀由来のパピルス写本としては、P⁴, P⁴⁵, ヨハネでは、P⁵, P²², P²⁸, P³⁹, P⁴⁵ があるが、そのいずれよりも早く、ヨハネ 1：1—6：11, 35—14：26, 29—21：9 を内容とする 3 世紀初頭の P⁶⁶ と同時代、ヨハネ 18：31—33, 37—38 を内容とする 2 世紀初期の P⁵² よりやや遅い。大文字大型写本の最も早い B 写本や s 写本よりさらに 150 年内外早く、かつこの本文は後述するように P⁶⁶ などとともにアレクサンドリア型 (Westcott-Hort の中正 “Neutral” 型) と一致するので、アレクサンドリア型の前駆的時期における本文の状況を示すものである。また、まったくの断片である P⁵² と違って、ルカとヨハネの両福音書の大

部分を含む写本であるためにこのパピルス写本の発見は、すこぶる大きな意味を新約聖書本文研究にたいして持つといわねばならない。

試みに P⁷⁵ のヨハネの部分から一、二箇所抜き書きしてみる。まず6:7—22。当該ページの1行目から15行目に当る。欠損部分は[]で示しその中に相当の補充語を入れる。P⁷⁵ はもちろん大文字書体でアクセント、氣息符号を記さないが、ここでは小文字で記し、アクセント、氣息符号も補うことにする。

8 λέγει αὐτῷ [ῷ εἰς ἐκ] [τῶν] μαθητῶν αὐτοῦ. Ἐνδρέας ὁ ἀδελφὸς [Σί] μωνος Πέτρου, 9 «Ἐστιν Πατρός τοῦ ἀδελφοῦ [όντε] χει ἐ ἄρτους κριθίνους καὶ βῆ ὄφα[ρ]εα·ἀ [λλὰ] ταῦτα τί ἔστιν εἰς τοσούτους; 10 [ε] ἵπεν [δέ] τοῦ, Ποιήσατε τοὺς ἀνούς ἀναπε [σεῖν ἦν δὲ κόρτος πολὺς ἐν τῷ] τόπῳ. [ἀνέπεσαν οὖν οἱ ἀνδρες τὸν ἀριθμὸν ὃν] πεντα [ακισθίλιοι. 11 ἐλαυθεν οὖν τοὺς ἄρτους [ότις καὶ εὐχαριστήσας] ἐδῶ[κ] εν [τοῖς ἀνακειμένοις] ει, διοιώσ καὶ [ἐκ] τῶν ὄφαρίων ὃ] σον ἥθελο [ν.] 12 ὡς [δέ] [ἐνεπλήσθησαν λέγ] ει τοῖς μαθηταῖς αὐ] [τοῦ, συναπτάγε[τε τὰ περισσέσσαντα] κλά[σ]ματα, ἵνα μή τι ἀπόληγται.

8 彼の弟子のひとり、シモン・ペテロの兄弟アンデレが、彼に言う。9「ここに大麦のパン5つと魚2ひきをもっている子供がいます。しかし、こんなに大せいの人にこれだけでは何になりましょうか」。10イエスは言われた、「人々を坐らせない」と。その場所は草の多いところであった。5000人はどの人々がそこに坐った。11そこでイエスはパンをとり、感謝したのち、坐っている人々に与え、また魚をも同様に彼らの望むだけ与えられた。12彼らが十分に食べたのち、彼はその弟子たちに言う、「少しでも無駄にならぬように、パンくずの余りを集めなさい」と。（逐語訳）

この箇所にみられるP⁷⁵の特色は、πέντε(5つ)をειと書き、δύο(2つ)をβと記し、Ιησοῦςをῆと、ἀνθρώπουςをἀνούςと略記する点にみられるが、これらはまたP⁶⁶にも共通する点である。また、10節のεἰπενの前にコイネー型などの大部分の写本はδέを、D写本、G写本など西方型の若干はοὖνを補っているが、B写本、K写本とともに、P⁷⁵はここに副詞をもたない。11節

の *ἔδωκεν* (与えた) は、他の多くの写本では *διέδωκεν* (分ち与えた) となっているが、P⁷⁵ は *¶* 写本などとともに *ἔδωκεν* をとっている。これらの諸点は、P⁷⁵ が P⁶⁶ や B 写本と *¶* 写本の代表するアレクサンドリア型の系統に属していることを示すと思われる。

つぎに、ヨハネ 6:17—22 をとりあげる。そのページの27行目から44行目に当る。

17 καὶ ἐμβάντες εἰς πλοῖον ἦρχ[οντο πέ] ραν πῆς θαλάσσης εἰς καφαρν[αούμ. καὶ] σκοτίᾳ ἥδη ἐγεγόνει καὶ ἥδ[η οὔπω] πρὸς αὐτοὺς ἐγεγόν [ει ὁ] το. 18 ἡ δ[ὲ θάλασσα] ἀνέμ[ου] μεγάλου πνέοντος [διετείρ]ατο. 19 ἐληλακότ [ειδὸν ὡς σταδίους] τοῦ. ἢ λ̄ θεωροῦσι τ [ὸν τὸν πε] ριπ [ατοῦντα ἐπὶ] τὴν θάλασσ[αν καὶ ἔ] γρὺς τοῦ [πλοίου γε] νόμενον [καὶ ἐφο] βήθησα [ν. 20 ὁ δὲ λέ] γει ἀντοῖς. Ἐγώ εἰμι, μ]ὴ φοβ [εισθε. 21 ἥθε] λον οὖν λαβεῖν α [ὑ] τὸ [ν ε] ις τὸ πλοῖον.] καὶ εὐθ [έως ἐγένετο] τὸ πλοῖον [ἐπὶ] [τῆς γῆς εἰς ἦν ὑπῆρ] ον. 22 [τῇ ἐπαύρι] [ον ὁ ὅχ] λος ὁ [ἐστηκὼς πέραν τῆς θα] [λάσσης εἰδο [ν δτε π] λοτ [άριον ἄλλο] [ο] ὑκῆν ἐκεῖ εἰ μὴ ἔ] ν, καὶ [στε οὐ συ] [ν] εἰσῆλθεν [τοὺς μαθητὰς ταῦς αὐ [τοῦ ὁ] το. εἰς τὸ πλοῖον [ν ἄλλὰ μ] ὄνος οἱ [μαθητῶι].....

17 そして、彼らは舟に乗って湖の向う岸カペナウムに渡りつつあった。そして、すでに暗くなりはじめたが、すでにイエスはまだ彼らのところに現われてはいなかった。18 そこに、強風が吹きつけて湖は荒れ出した。19 彼らは、5 キロか 7 キロほど、漕ぎ出したときイエスが湖上を歩いて舟に近づいて来られるのを見て、恐れた。20 すると、彼は彼らに言う、「わたしだ。恐れるな」と。21 そこで彼らは彼を舟の中へ迎え入れようとした。すると、舟はすぐに、彼らが航行の目的地としたところに到着した。22 翌日、湖の向う岸に立っていた群衆は、そこに小舟が 1 艘しかなく、またイエスがその弟子たちとともに小舟には乗らず、ただ弟子たちだけが………、(逐語訳)

この箇所でも、'Ιησοῦς, 'Ιησοῦν はそれぞれ *το*, *το* と略記されるが、これも P⁶⁶ にみられる方法である。17 節では、*ἥδη* 「すでに」 がくり返えされるが、こ

れは他にはみられない。2番目の *ἥδη* は明らかに文意を乱すので、これは P⁷⁵ の写字生の重複誤記であろう⁸⁾。同節の *πρὸς αὐτοὺς ἐγεγόνει ὁ Ιesus* 「イエスは彼らのところへ現われて」の語順は、B写本においては、*Πρὸς αὐτοὺς ἐληλύθει ὁ Ἰησοῦς* となっており、他の諸写本では動詞が最初に来る場合が多い。ここでもB写本と P⁷⁵との共通点がみられる。ただこの動詞は、B写本においては *ἐληλύθει* (*ἔρχομαι* の過去完了形) であり、P⁷⁵では *ἐγεγόνει* (*γίνομαι* の過去完了形・自動態) であって、この点 P⁷⁵は孤立している。これは、P⁷⁵の写字生が前行の *ἐγ-εγόνει* にひかれて *ἐγεγόνει* と書いたのかも知れない⁹⁾。19節の *ἐπὶ τὴν θάλασσαν*（湖上を）は P⁷⁵特有で、他の写本では *ἐπὶ τῆς θαλάσσης* である。同節の *καὶ* (*εἰκοστ πέντε*, 25の意), *λ* (*τριάκοντα*, 30の意) の略記号は、P⁶⁶にもみられる。ここでも、P⁷⁵は P⁶⁶と共に多くの共通点をもち¹⁰⁾、またB写本とも近似することが明らかである。このほかにパピルス写本では Pacific School of Religion Papyrus 2 (P²⁸)¹¹⁾も、P⁷⁵, P⁶⁶に近い。P²⁸は、P⁷⁵と P⁶⁶から多少の相違を示す場合があるとしても、三者は概ね同一の本文に由来すると思われる¹¹⁾。

Bruce Metzger の指摘によると、P⁷⁵はサヒド語訳写本といくつかの特色ある読み方において一致している¹²⁾。例えば、ヨハネ10：7 “ἐγώ εἰμι ἡ θύρα τῶν προβάτων.” 「わたしは羊たちの門である」の “ἡ θύρα” 「門」はサヒド語訳写本では、“ο ποιμῆν” 「羊飼い」となっている。P⁷⁵も同様 “ο ποιμῆν” である。また、ルカ16：19 の “ἄνθρωπος δέ τις ἦν πλούσιος.” 「ところで、ある金持ちがいた」には、この人の名前がない。古代コプト教会には、この金持ちの名は「ニネベ」であったという伝説があり、サヒド語訳では “Nineue” と記されたが、P⁷⁵の写字生は、これを “Νινευης” と表記すべきところを、誤って “Νευης” と記したのであろう、と Metzger は推測する¹³⁾。この、P⁷⁵とサヒド語訳写本との近似関係がいっそう明確にされると、P⁷⁵の系統づけや性格の確定に有力な手がかりとなろうし、またそれによって、写本の歴史の再構成に貴重な光を与えることとなるであろう。

glot〔対訳聖書〕(The Complutensian Polyglot)を基とし、約100年の経過をもって欧洲および英國において地歩を固めたいわゆる「公認本文」Textus Receptus¹⁴⁾は、Brian Walton, Richard Bentley, Karl Lachmann, von Tischendorfをへて、1831年、Brooke F. Westcott と Fenton J.A. Hort が刊行したその“*The New Testament in the original Greek*”, 2 vols. によってそのいわゆる「公認」の王座を追われたのであったが、この Textus Receptus は Erasmus まで遡れば、Westcott-Hort まで実に三百数十年間、公認の虚名を保ち、その後も、例えば The British and Foreign Bible Society をして1904年にいたるまでこの本文の刊行を継続させるほどに広い愛好者層を有していた。しかし、Textus Receptus の底本とされた中世中・後期の小文字写本によらず、大文字写本、古ラテン語訳写本、古代の教父たちの聖書引用などを主資料として4世紀の本文の状況を復元しようとする近代的本文批判の努力が、1831年 Karl Lachmann の本文刊行に結実したとき、Textus Receptus の権威はすでに実質的に覆えされていたのであった。これに続いた Tischendorf の B 写本の評価、N 写本をはじめとする十数箇の写本の発見と彼自身の本文の刊行（1841年から30年間、8 版にわたる増改訂）は、Westcott-Hort の偉業のために十分の道備えをなしたものであった。

Westcott-Hort の本文批判の方法は、上記の書の第 2 卷 “Introduction and Appendix” (Hort の単独執筆による) に詳細に述べられている。その方法の特色は、新約聖書の諸種の本文の間に読み方の共通点と相違点を探り、これによって写本の Families を分類し系統づけ、それぞれを四つの歴史的・地域的状況に位置づけるところにある¹⁵⁾。もっとも新らしい型は「シリア型」“The Syrian Type”とよばれ、シリアのアンテオケで Chrysostomus の指導の下に数多くの異読を示すギリシャ語写本を整理し、本文の明瞭さと完全さの確保を旨とする改訂編集作業を行った結果でき上った特色的ない本文の型である¹⁶⁾。この作業はやがてビザンティウムに移りそこを本拠として行われたので、ビザンティン型ともよばれる。A 写本、E 写本、N 写本など 5 世紀以後の大文字写本、大多数の小文字写本がこれに属する。Textus Receptus はその基礎をこのシリア型本文のもっとも新らしいいくつかのものにおいていたのであって Com-

plutum の Polyglot がその序文に “antiquissima et emendatissima” 「古くかつ正確な」本文を底本にしたと記していても、それが事実であったとは言うことができない。また、あの Elzevier 本文第 2 版序文の “Textum ergo habes, nunc ab omnibus receptum: in quo nihil immutatum aut corruptum damus.” 「それゆえ、貴下は今や、すべての人によって受容された本文を有するのである。われわれはこの本文において何らの変更も毀損も加えない」という、Textus Receptus の語と、それによる誤解の起りとなった語句をにがく噛みしめるほかはない。

Westcott-Hort によって指定された第 2 の型は、「西方型」“The Western Type” であって、古くから西方で用いられた本文の型をいい、その特色は、語句や文体が自由に変改され、挿入や削除も多く、調和的加筆がしばしば行われているとして、この型も重点をおかれなかった。D 写本(5世紀), D^o 写本(6世紀), 古ラテン語訳写本, シリア語訳写本, ラテン教父などがこれに属するとされた。

第 3 の型は、「アレクサンドリア型」“The Alexandrian Type” とよばれ、主要な関心は用語や文体を洗練することにあるので、異読を持ちこむ程度は大きくない。C 写本(5世紀), L 写本(8世紀), エジプト語訳写本, Clemens や Origenes などのアレクサンドリア教父など。

Westcott と Hort が最も重視したのは第 4 の「中正型」“The Neutral Type” であって、他の型の本文による影響をうける程度が少なく¹⁷⁾、手稿本に最も近いものと考えられた。B 写本がその代表であって、E 写本がこれに次ぐ。これらは 4 世紀のアレクサンドリアで作製された写本である。

このような方法に基いて、本文の歴史的発展を 4 世紀のアレクサンドリアまで跡づけた Westcott と Hort は、同時にそれによって Textus Receptus の足場を根底から崩壊させたのであった¹⁸⁾。

Westcott-Hort の新約聖書本文批判にたいする貢献は、まことに大なるものがあった。彼らの築いた道を、Eberhard Nestle も、Burnett H. Streeter も、Frederick G. Kenyon も Kurt Aland も、それぞれ歩んで来た。Nestle-Aland の新約聖書ギリシア語テキストは 1963 年で 25 版を数え、類書の中で格段の普及

度を示しているが、Aland が校合に加わってから多少折衷度を増したとはいえる、なお基本的には Westcott-Hort の道を外してはいない。

しかし、Westcott-Hort の本文批判の基本前提、すなわち B 写本および κ 写本を、原本をもつとも純粹に伝える本文とする立場は、今日かなりの、チャレンジに遭遇している。かつての κ 写本の発見のような、あるいは B 写本がヴァティカンの神秘の幕の中から姿を現わしたような衝撃的事件は、あるいは期待できないかも知れぬとしても、The Chester Beatty Papyri や The Bodmer Papyri のような 3 世紀から 2 世紀にかけてのパピルス写本の発見があいつぎ、4 世紀初頭の壁が破られて、より古い時期への展望がしたいに開かれつつある状況においては、B 写本や κ 写本の権威を固定化して新約時代にまで眼を届かせる努力を阻むことはできないであろう。そこで問い合わせがなされる。B も κ も原本の純粹な書き移しというより、これらもやはりアレクサンドリアを中心とする北エジプト地方で、4 世紀前半に流通していたギリシャ語写本群の Recension であったのではないか。したがって、B も κ も種々の写本や教父たちからあい異なる要素の影響もうけ、また諸種の校合の結果生れてきた写本ではなかつたであろうか。「新約聖書本文史の問題の解決は、B と κ の本文の背景を明らかにすることにある。問題は、われわれが、B と κ において西方型からカイザリア型あるいは混合型を通じての漸進的成长を究明しようとするのか、あるいは、B と κ を西方型その他の“wilder”な型に影響されていない純粹な本文に還元できるかどうかを考究するのか、どちらかということである。すなわち、われわれの現代的な版はいかなる本文に基くべきであるか。上質だが校訂を蒙った本文にか。原本にか。あるいは少くともきわめて初期の段階の本文にか」¹⁹⁾ と。

3

p^{75} の本文が、B 写本のそれと近似していることはさきに述べた。また P^{66} の本文とも、また P^{28} とも共通性のあることを指摘した。これらはアレクサンドリア地方において、2 世紀後半から 4 世紀前半まで 200 年ほどの経過の中で生れたものである。エジプトはその頃のヨーロッパ西方地域と違って、ヘレニ

ズム時代いらいの伝統ある高度の文化をもち、アレクサンドリアには優れた学校や図書館が存在し、文献研究や本文批判も盛であった。この状況の中で新約聖書の校合や校訂が行われた場合、種々の本文に接しつつも、なお余りに自由な変形や改訂を抑止する力が働かなかったであろうか。

さきに述べたように、P⁷⁵ の写字生は、注意深い筆写の學者のエキスパートであつたらしい。彼は P⁴⁵ の写字生のように自由に表現を変えて筆写することはせず、また P⁶⁶ の写字生のように不注意な誤記を多くおかすことなく、能う限り忠実に彼の前の原本を書き写したのであろう。P⁶⁶ にはいささか誤記が多いとはいえ、その使用した原本は、P⁷⁵ のそれとおそらく同じものであったと思われるゆえに、良質の本文に繋がる位置を保っている。いわゆる前アレクサンドリア型としてこれらの写本は“control”された本文を示すものである。B 写本はこの流れをくんでいる²⁰⁾。4世紀の初期、この地のある聖書筆記者が、心を静めて新らしい写本を筆写しようとしたとき、彼は多くの本文を検討したに違いなかろう。しかし、彼はその際、諸種の異読を校合して新規の混合型本文を作製するよりは、やはりもっとも信頼に値する本文を選び、改変は最少限に抑えつつそれを筆写するに努めたのではなかろうか。彼もまた P⁷⁵ の写字生と同様きわめて注意深い筆記者であった。その結果完成された写本が、今日に伝わる B 写本であるとするならば、この B 写本と、これに先んじて同じアレクサンドリアで2世紀末いらいつぎつぎに作製されていた P⁷⁵, P⁶⁶, P²⁸ あるいはさらに P⁴⁵(部分)や2世紀初期の P⁵² などとも、互いに近似性をもつのは当然のことであろう。もっとも、これらのパピルス写本と B 写本の間に直接の文献的関係があったかどうかは明瞭でない。しかし少くとも、B の写字生の拠った本文が、これらのパピルス写本の底本となっていたものと考えることは許されてよからう。基本的には共通の本文に拠りつつ、なお長年月の経過の間にそれぞれにかなりの異読も採用されたために、多くの共通点をもちつつ多少の相違点を示すこととなったのであろう。

Calvin L. Porter は “Papyrus Bodmer XV (P⁷⁵) and the Text of Codex Vaticanus”, Journal of Biblical Literature, LXXXI, 1962²¹⁾において、P⁷⁵ の読みと B 写本のそれとをヨハネの部分において逐一対照し、その異同を明ら

かに提示した。Porterによれば、両写本の相違箇所は205箇所であって、これはB写本とP⁷⁵の相違箇所が702にのぼり、W写本とP⁷⁵の相違箇所も506の多きを数えるのに比して、きわめて少ない。相違箇所も、ほとんどの場合、用語、文体、構文は同じのまま、冠詞や代名詞の有無（これらを省くのがP⁷⁵のくせである）や、前置詞の相違などによるものであって、両者はまず同一の本文に拠って書かれたとみるのが至当である。例えばヨハネ4：1—26について両者を比較してみよう²²⁾。

| | P ⁷⁵ | B |
|------|--------------------|--------------------------------|
| 4：1 | ἢ | — |
| : 3 | πάλεν | — |
| : 5 | ἔρχεται | οὖν εἰς πόλεν τῆς σαμαρείας |
| : 9 | οὗσης σαμαρειτίδος | σαμαρειτίδος οὗσης |
| : 12 | δέδωκεν | ἔδωκεν |
| : 16 | τὸν ἄνδρα σου | σοῦ τὸν ἄνδρα |
| : 17 | καὶ λέγει αὐτῷ | καὶ εἶπεν αὐτῷ |
| : 18 | εἴπας | εἴρηκας |

他のペリコーペーも大同小異である。このような顕著な共通性と僅少な相違とは、両者が共通の本文を祖として持っていたことを首肯させるであろう。その場合、この両者の祖である本文の年代は、P⁷⁵の年代である175—225A.D.より以前ということになる²³⁾。したがって、前アレクサンドリア型新約聖書本文は、新約時代とほとんど指呼の間に位置したと考えてよからう。

Westcott-Hortの志したところは、新約聖書諸本文の間にある異同を整理して本文の型を分類し、これらを歴史的・地域的に位置づけることであった。それによって彼は古く良質の本文に到達できると考えた。そしてこのことがとりも直さず、300年のTextus Receptusの虚名を剥ぐことともなったのであった。今日もはや、Textus Receptusはまず問題にならない。しかし、Westcott-Hortの客観主義にたいして、内的証拠“Internal Evidence”を本文自体の中に見出しつつその性格と価値を究明すべきだとする立場や、本文の歴史の再構成はそ

そもそも不可能とする立場が、近年主張されてきた。(B. Weiss, K. Lake, G. D. Kilpatrick, R. Grant, A.F.J. Klijn, K. Aland 等)。けれども、一連の貴重なパピルス写本の発見・究明と、とくにそれらと B 写本の比較研究とは、新約聖書本文の重要でありながら未開のままであった時期の状況を、かなりの程度明らかにしつつある。さらに、アレクサンドリア教父たちの使用した聖書本文の検討や、この時期の *Lectionaries* におけるそれの一層の解明、さらにつぎつぎに発見が行われつつあるサヒド語、古ラテン語その他の古代語訳聖書本文の研究が深められていくことにより、新約聖書本文の歴史は一層明らかにされるはずである。Ernest C. Colwell は、"Hort Redivivus: A Plea and Program", 1969 という文章を書き、その結論において、文献的証明こそが、多くの場合内的証拠にまさって榮誉の座を提供してきたことを述べたあと、「歴史家は確実さを断言はしない。しかし彼は、証人たちがその有する証拠を法廷に持ち出すことが許されるように、そしてそれらの証拠が厳粛に採用されることを要請するのだ」というある学者の言葉を引用して、「Hort がよみがえるなら、そうなるであろう」と結んでいる²⁴⁾。Papyrus Bodmer XIV-XV, Papyrus Bodmer II, The Chester Beatty Papiri とヴァティカン写本とを結ぶ歴史のわくの中で、新約聖書本文はその中心的な流れを形成したのであろう。Westcott-Hort はこのことを百年近い以前に語っていたように思われる。

注

- 1) Kurt Aland, Kurzgefasste Liste der griechischen Handschriften des Neuen Testaments, Arbeiten zur N. T. Textforschung, I, 1963. 新約聖書写本の登録は Casper René Gregory によって1900年に始められ Ernst von Dobschütz, Walter Etester によって継承され、現在は K. Aland がこれを行なっている。Bruce M. Metzger, The Text of the New Testament, 1969, 橋本滋男訳、「新約聖書の本文研究」1973, 282—95頁に詳細なリストがある。
- 2) K. Aland, "Das Neue Testament auf Papyrus" in Studien zur Überlieferung des Neuen Testaments, Arbeiten zur N.T. Textforschung II, 1967, S. 91-136.
- 3) K. Aland, Materialien zur neutestamentlichen Handschriftenkunde, Arbeiten zur N.T. Textforschung III, 1969.
- 4) この発見は Bernard P. Grenfell と Arthur S. Hunt による。B.P. Grenfell and A.S. Hunt, The Oxyrhynchus Papyri, 18 vols., 1897-1941.

- 5) Victor Martin et Rodolphe Kasser, Papyrus Bodmer XIV, Evangile de Luc chap. 3-24, Papyrus Bodmer XV, Evangile de Jean chap. 1-15, Bibliotheca Bodmeriana, 1961.
- 6) Ibid., p. 13. “Une date pour la transcription de nos Evangiles située entre 175 et 225 de notre ère est la supposition la plus probable.”
- 7) パピルス写本としては、P⁴⁵, P⁴⁶, P⁶⁶, P⁷⁴, P⁷⁵などはかなり大部である。P⁷⁵については、既述。P⁶⁶は 15cm × 14cm の紙面で 104 ページ。ヨハネ 1:1-6; 11:6; 35b-14:15 を含む。P⁴⁶は 27cm × 17cm の紙面で 86 枚。ヘブル、I、IIコリント、エペソ、ガラテヤ、ピリピ、コロサイ、Iテサロニケの一部を含む。それゆえ、これらは、年代の早さと分量から、きわめて貴重な資料である。
- 8) 写真版によると、2番目の $\delta\eta$ は ‘*H**A*’ となっている。そのあとの欠損部分を補うと、‘*H**A**H*’*OYWNW* と書かれていたのであろう。‘*H**A*[*H*’*OYWNW*] の ‘*H*’ のマークは、重複誤記に気づいた写字生が取り消しの印としてつけたのであろう、と Jack Finegan は推測している。Encountering New Testament Manuscripts, 1975, pp. 106-07.
- 9) J. Finegan, op. cit., p.107.
- 10) Ernest C. Colwell は、P⁴⁵, P⁶⁶, P⁷⁵ のそれぞれの写字生の写字のくせを分析して興味あるデータを提供している。3者の Singular Readings のうち、三つの種類の異読を統計的に示す。

Itacistic Readings(口述筆写の場合、聞きとりの誤りによって生じる異説)

| | |
|-----------------|--------|
| P ⁴⁵ | 90箇所 |
| P ⁷⁵ | 145 // |
| P ⁶⁶ | 400 // |

Nonsense Readings(写字生の不注意による誤記)

| | |
|-----------------|-------------------------|
| P ⁴⁵ | 10% (Singular Readings) |
| P ⁷⁵ | 25% (//) |
| P ⁶⁶ | 40% (//) |

Leap(ある語からつぎの同語あるいは同じシラブルまでの間の語句をとばしてしまった誤記)

| | |
|-----------------|----------------------------|
| P ⁴⁵ | 16箇所(前へ), 2箇所(後へ) |
| P ⁷⁵ | 27 // (//), 10 // (//) |
| P ⁶⁶ | 54 // (//), 22 // (//) |

Colwell によると、写字上のくせから、P⁴⁵と P⁷⁵ の写字生はそれぞれ注意深い熟練者であることがわかる。前者はとくに簡明な表現に長じ、そのためにはしばしば本文の変更をあえて行う。後者は忠実な筆記者でできるだけ正確に筆写することを中心置いていて前アレクサンドリア型を保持する。前 2 者にたいして P⁶⁶ の写字生は不注意な筆記者でその関心は主としていかに美しく筆写するかにあった。その本文

- は混合型ではなく、 β 型 (Westcott-Hort の中正型) の一つの Corruption の観を呈する。E.C. Colwell, Studies in Methodology in Textual Criticism of the N.T., Chapt. 8, "Method in Evaluating Scribal Habits", 1969, pp. 106-24. Cf. J. Finegan, op. cit., pp. 183ff.
- 11) P²⁸はBerkeley の Pacific School of Religion 所蔵。ヨハネ 6:8-12, 17-22を示す。3世紀。アレクサンドリア由来。Cf. Jack Finegan, op. cit., p. 107-10.
 - 12) Ibid., p. 110.
 - 13) B. M. Metzger, op. cit.; 橋本訳42—43頁, 312頁。写真版3には *πλούσιος ὄνοματη Νεύης* とみえる。サヒド語訳写本の本文はだいたいアレクサンドリア型のそれに一致する。また、4世紀末の Priscillianus によると、この名は "Finees" となっているが、これは民数記25:7, 11でエレアザル(ラザロに当る)とビネハスが結合されていたことによるのであろう。cf. B. M. Metzger, A Textual Commentary on the Greek N.T., 1971, pp. 165-66, "πλούσιος".
 - 14) 基督教研究28卷2号所載拙稿「Textus Receptusに関する二、三の考察」参照。
 - 15) Cf. Westcott-Hort, Introduction and Appendix, p. 57. J. A. Bengel, J.S. Semler, J.J. Griesbach などにおいて、それぞれの方法で同様の試みがすでに行われていた。Westcott-Hort はこれらを継承しつつ大成をはかったといえる。
 - 16) Ibid., pp. 134f.
 - 17) Ibid., pp. 250f., p. 225.
 - 18) Textus Receptus の権威を信じる人々は、Westcott と Hort の本文完成後もなお数多くいた。代表的人物として Chichester の Dean J.W. Burgon のような人がいる。
 - 19) A.F.J. Klijn, Papyrus Bodmer II (John i-xiv) and the Text of Egypt, New Testament Studies 3, 1956-57, p. 328.
 - 20) cf. E. C. Colwell, op. cit., Chapt. 11, Hort Redivivus: A Plea and a Program, 1969, pp. 167-68.
 - 21) Calvin L. Porter, Papyrus Bodmer XV (P⁷⁵) and the Text of the Codex Vaticanus, Journal of Biblical Literature, LXXXI, 1962 pp. 368-74.
 - 22) Ibid., p. 369 による。
 - 23) B. M. Metzger, Historical and Literary Studies; Pagan, Jewish and Christian, 1968, pp. 157-58.
 - 24) E. C. Colwell, op. cit., pp. 170-71.

(本学神学部教授)